

日本列島では近年、阪神・東日本・熊本などの大地震や津波、火山噴火、台風や豪雨などの自然災害が多発しています。そして今後も、首都直下型地震や東南海地震などによるさらなる被害が予測されています。

2016年8月25日に国連大学のチームが、災害リスクの世界ランキングを発表しました。その中で日本は、技術的に災害への対処能力が高いため、総合評価では調査した171カ国中で17位。しかし災害へのさらされやすさでは第4位です。この調査では、地震、台風、洪水、干ばつ、海面上昇の5つの災害が対象で、その結果、水没による国土の消滅が危惧される南太平洋の島国バヌアツとトンガが1・2位を占めました。しかし、この調査に火山噴火も加わるなら、日本はさらに上位に入る世界で有数の災害大国でしょう。大災害が起きると、まずはライフラインがストップし、水と食糧が不足し、トイレも使えなくなり、生きるための基本が脅かされることになります。じつは東南海地震で心配されることのひとつが、静岡県富士市周辺に製紙工場が集中しているため、地震や津波でその操業が停まるとトイレトペーパーの約4割が、1カ月ほど供給が滞ると予想される点です。そこで水や食糧だけでなく、携帯トイレと紙の備蓄が防災対策の大きな課題として取り上げられるようになりました。

東日本大震災では私の住む茨城県の田舎町でも震度6強の揺れを記録し、我が家は半壊。電気が止まり、3週間断水、多くの人がトイレを流すために沢水や側溝から水を汲んだりして苦労していました。また、各地でトイレトペーパーの買い占めも起きました。ところが以前から葉っぱノグソをしていた私は、世間の混乱を尻目に、排泄に関しては普段とまったく変わらない生活を送ることができたのです。

中学生のころから水戸の学校に通っていた私は、朝夕の通勤通学列車の中で大人たちの不満や不正の会話を嫌というほど耳にして、思春期の純真な夢は破れ、人間不信に陥りました。そしてついに、山中での仙人のような暮らしを夢見て高校を中退。新天地を求めて北海道から九州まで、山々を巡る一人旅を始めました。

当時は日本中が高度経済成長に沸き、各地で開発による自然破壊の現場を目にする一方で、旅で出会った多くの人々の親切に人間不信は氷解。人間社会に復帰して自然保護運動をする中で、1973年秋に尿処理場建設反対の住民運動に遭遇しました。人々が処理場に対して汚いイメージを持っているのはわかりますが、自分でトイレにウンコをしている以上は、その始末にも責任を持つべきです。このことをきっかけに人間生活と自然の関わりを根本的に考え直した結果、人が自然と共生するにはノグソが最も良いという結論に達したのです。なぜなら自然の中では、人のウンコはほかの獣や虫などに食べられ、カビやバクテリアに分解されれば土の養分になって、最後は草木を育てるからです。

とはいえ、自然保護運動の一環として野山の清掃活動を積極的に行っていた私は、汚いノグソ跡につくづく閉口していました。どうにもならない生理現象に野外ではノグソはやむを得ず、特に物陰には予想を超える大量のウンコと紙が散乱し、醜い姿をさらしていたのです。そこで、見た目の汚らしさも悪臭もなく、踏んづけたりして困ることもないように、林の中で穴を掘り、ウンコと使った紙を一緒に埋めるというやりかたで、74年1月1

日から信念を持ってノグソを始めたのです。そして78年には第二次オイルショックで起きたトイレットペーパーの買い占めを機に、さらに紙を減らそうと葉っぱで粗拭きし、たった1枚のティッシュペーパーで仕上げる方法に改めました。

ところが、春にしたノグソ跡をうっかり掘り返してしまった90年秋のノグソでは、ウンコと葉っぱは影も形もなくなっていたのに、紙だけは埋めたときのままの真っ白な姿で土の中から現れたのです。紙の原料は木ですから、土の中ですぐに分解すると思っていただけに、これはショックでした。製紙過程でさまざまな化学物質が染み込むでしょう。それに加えて、樹木の伐採や製紙工場での環境破壊なども無視できません。それからは紙の使用を一切やめ、葉っぱで拭き、最後は少量の水で仕上げる「伊沢流インド式ノグソ法」を確立しました。

それまでは葉っぱを粗拭き用と割り切っていたため、拭き心地には無頓着でしたが、いざ葉っぱだけになってみると拭き心地の違いが気になって仕方ありません。そして気持ち良く拭ける葉っぱ探しが始まったのです。肛門に意識を集中し、四季折々の葉っぱを手当たり次第に試すうちに、しっとりやわらかなものや、滑らかな尻触りで紙よりずっと拭き心地の良いものが何十種類も見つかりました。

自然との共生につながり、災害時のサバイバルにも強みを発揮する葉っぱノグソ。ぜひともこの素晴らしさを多くの人に伝えたいと、本書の刊行を決意しました。